



さんいちぶつくす

風葬戦線

定価三六〇円

一九六七年十二月一日 第一版発行

著者 © 三好 徹 一九六七年

発行者 竹村 一

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九

電話東京(一九一)三一三一―五番

振替東京八四一六〇番

印刷所 同興印刷株式会社

製本所 本間製本株式会社

三好 徹

一九三一年 生まれる

一九五一年 読売新聞記者となり十五年在社

一九五九年 『遠い声』(第八回文学界新人賞佳作)を發表

一九六〇年 長篇推理小説『光と影』を公刊

一九六七年 *『風塵地帯』第二〇回日本推理作家協会賞受賞

主 著 『風は故郷に向う』『海の沈黙』『黎明の時』

『閃光の遺産』『円形の賭け』その他(*印三一新書)

現住所 横浜市港北区日吉本町一四二四

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

さんいちぶつくす



風葬戦線

三好徹

三一書房

内 容

第一章	暗流への序奏／	5
第二章	サイゴン情報／	47
第三章	戦場の掟／	125
第四章	バード機関／	185
第五章	風葬戦線／	257

第一章

暗流への序奏

二年ぶりに降り立った羽田空港には、肌を刺す寒気がはりつめていた。タラップからロビーまでの短い距離を、私はコートの襟を立て、背筋を硬くして歩いた。コツコツと鳴る私のハイヒールの音が、からだの底にまでひびくような孤独感をかきたてた。たしかに、私は孤独だった。二年前にこの空港を発ってハワイへ向かうとき、私のそばには、ジムが寄りそっていた。ジムの手が私を支え、力強く導いていた。日本を離れることの寂しさも、異郷へのかすかな不安も、かれが横にいてくれることだけで、なにかしら薄められてしまうような感じさえしたものだ。それから二年後のいまの私を支えているものは、ジムのがっしりした腕ではなく、人にきかれたら気でも狂ったのかといわれそうな考え、いや考えというよりも淡い希望だった。

税関の手続きをすませ、到着ロビーに出てみると、従兄の村野卓也の微笑をたたえた顔があっ

た。それを見出したとき、抑えていた感情がどっと噴き出して私はなにも口にすることができず、ただ咽喉をつまらせるようにして、声にならぬ声をもらしたただけであった。

「お帰り」

卓也は優しくいって、私の旅行ケースをひきとり、背中に手を回して駐車場の方へ押し出すようにした。

「ハワイからいま時分の日本にいくと、寒くて震えあがるだろう？ ホテルは、ローヤルを予約しておいたからね。さア、案内するよ。きみがいたころには、なかったホテルだが、設備なんかは、わりあい評判のいいホテルなんだ」

かれは多弁になっていた。私の識っている村野卓也は、それほど口数の多い男ではなかった。ともすればふさがちになり、自分を沈黙に閉じこめようとする私の気持を察して、そういうふうに振る舞っているにちがいがなかった。その思いやりは、私の胸にしみた。この先どうなろうと、あるいはいかなる運命が私を待ち伏せていようと、そのとき私は、日本の土を踏みしめていることに、つかの間の安らぎを感じていた。

車が高速道路にのると、色とりどりの灯がまたたきはじめて東京の暮景がひろがった。陽が海に落ちると、昼から夜へとまたたくうちに移ってしまうハワイでは見ることのできぬ、しっとりとした日本の暮色だった。かげりを帯びたその曖昧なやさしさに、私の心は徐ろにひらいて行った。

卓也は、敏感にそれを感じとったようだった。ちらっと私の方を見て、

「どう？ 久しぶりに吸う日本の空気の味は？」

といった。

「そうね、なにかぼやけた感じね」

「そうかね。住んでいるぼくらにはわからないが……」

「でも、それがかえってなつかしいわ。向こうは、なんでも強烈な原色がギラギラしている感じで、馴れないうちは、とっても疲れたわ」

「行ったことはないが、そうらしいな」

「聞きおくれてしまったけれど、皆さん、お元気？」

「ああ、元気だよ」

卓也は、私の家族の消息については、問いかえさなかった。

それは当然のことだった。私の両親はとうに亡くなっていた。唯一の家族といえば、夫のジェームス・半田しかないのだが、かれの消息をだれよりも知りたがっているのは、この私なのだ。

商用で来日したジムと知り合ったのは、約二年半前のことだった。私がかれと出会ったのは、卓也がつとめている病院の卓也の部屋でだった。卓也は整形外科の専門医で、若いがしっかりした技術もち、いっさいを病院長から任されていた。三十近いのに独身で、両親の家から離れ、

病院の近くに部屋を借りて住んでいた。

その日、私は、勤めの帰りに卓也の部屋に寄った。どんな用だったかは、いまはよく覚えていない。はっきりと記憶に刻まれているのは、その日が雨だったということくらいなのだ。

ドアをノックし、返事も待たずに押し開くと、土間に接したリビングルームに陽灼けした青年が卓也と向かいあって坐っていた。

「あら、お客さま？　だったらまたくるわ」

といって帰ろうとした私を、卓也はあわててひきとめた。

「いや、いいんだよ。お客さんは、すぐにお帰りになる」

卓也の失礼な言葉に、青年は怒った様子はなかった。かれは立ち上って、なまりのある日本語で「ジェームス・半田です」と自己紹介した。

卓也からのちに聞いた説明では、ジムは日系の二世で、医療器械の売り込みにきたのだそうである。

「あちらのセールスマンというのは、じつに熱心だな。残業なんかしないと聞いていたんだが、それは時間決めの仕事の場合だけで、セールスの連中は、相手が許しさえすれば、どこへでも何時間でもつきまとうんだ。あのときも、宿直明けのぼくを追っかけて、部屋まで追ってきていたんだ」

ということだった。

それからどうなったか。詳しく語る気にはなれない。要するに、私は半年後にジムと結婚し、日本を離れたのだ。

ハワイでの暮らしは、考えていたよりも辛くもあり、そして辛くもなかった。風俗や習慣の相違については前者があてはまり、家計や言語については、後者の感じだった。そしてどちらにしても予測をはるかに超えるというふうな強さではなかった。ただし、唯一の例外を除いては。

それは九カ月前のことであった。

配達された封筒から出てきた紙片は「アメリカ合衆国大統領はここに貴君の光栄を祝し……」の字句ではじまり、向こう一年間、私とジムとが別離しなければならぬことを告げていた。

新聞には、毎日のように、ベトナムの戦況が報道されていたが、その日までの私にとって、ベトナムは遠い国だった。テレビで見るベトナム戦線の実写も、劇場で見る戦争映画もたいして差はなかった。それが実写であるとわかっていても、兵士の流す血は、ブラウン管の上での黒いしみでしかなかった。

私は立ちすくんだ。肩の上を、なにか強い力で抑えられたような感じで眩いた。

「わたし、アメリカ人と結婚していたのね」

ジムは、その言葉を逆用した。

「そうさ。これはアメリカ市民の義務だよ。きみはアメリカ市民と結婚したことを、けっして悔んではないだろうか？」

「わたしは、あなたと結婚したことを、悔んでなんかいないわ。むしろ誇りに思っているというべきだわ」

ジムは私に接吻した。それだけで、私たちには、お互いになにを考えているかを、じゅうぶんに知り得たのだ。

「毎日、手紙を書くわ」

と私はいった。ジムも、同じことを誓った。そして、私たちはその言葉を実行した。

手紙は、ときには、二日分いっしょに配達されることもあったが、発信の日付から数日の遅れで届いた。私たちは、互いに書くことをたくさんもっていたし、飽くことなくかわし続けた。たいてい午前中に手もとに配達されたが、着きさえすれば、その日を私は充実した想いで過ごすことができた。

一月の中旬、一日、配達のない日があった。その日一日、私は不機嫌だったが、不安ではなかった。それまでと同じように、あすになれば、二日分いっしょに届くと考えていた。

だが、翌朝も配達はなかった。配達されたのは、請求書や広告ばかりだった。私は、はじめて不安を抱いた。

ジムが、サイゴン西南のデルタ地帯で戦闘中に行方不明になった旨の内報がもたらされたのは、その日の夕刻であった。行方不明は戦死ではない、と説明されたが、錯乱した私には、その違いを考えるゆとりのもてるはずがなかった。私の意識のなかにあるものは、ジムに手足がなくても

いいから生きていてほしい、という願望であり、軍が夫を捜し出してほしいという希望であった。私は毎日を不安と焦躁のうちに送った。何度か問い合わせたが、全力をあげて捜索中という答えを得たにすぎず、それからのちは明るいハワイの空も、私にとっては、灰色の翳りしか感じられなかった。明るすぎることに、敵意さえ抱いた。

そんな状態のとき、ある人が、ベトナムに捕えられたG Iを一万ドルの身代金とひきかえに救い出した実例のあることを教えてくれた。行方不明というのは、戦死よりも捕虜になっているケースが多いのだから、悲観することはない、戦争が終れば帰ってくる可能性もないわけではない、といって、その人は慰めてくれた。

この話は私に希望を蘇えらせ、同時に、みずからの手でジムを捜し出したいという強い衝動を私にもたらした。一万ドルくらいならば、働きもののジムが残してくれた貯金や、かれが送金してくれたものでつごうできるのだ。私は万難を排してベトナムへ行こうと決意した。

いざ実行にかかってみると、ベトナム行きは、思いのほかに困難だった。というのは、ベトナム派遣将兵は、一年間のうちに二回各五日間の有給休暇をもらえることになっており、家族は、ホンコン、バンコック、シンガポール、東京などでいっしょに過ごすことを認められていたが、現地への入国査証は原則として下りないのである。

だが、私は、ハワイでのんびり待つ気にはなれなかった。ともかく東京まで行き、なんとか足掛りを得ようと考えたのだ。それに、いうまでもなく、日本は私の生まれ育った国だった。ジム

のいないハワイは、私にとって、太平洋の楽園ではなく、絶海の孤島でしかなかった。

そういう回想にふけっている間に、私を乗せた車は、高速道路のゲイトを出て、街なかに入っていた。

「どう？ 東京は変わっているかい？」

と卓也が再び話しかけてきた。

「そうねえ、よくわからないわ。変わったような気もするけれど、それは東京が変わったからではなくて、わたし自身が変わったせいじゃないかっていう気もするし……」

卓也は困ったような表情になったが、すぐに断定的ないい方で応じた。

「きみは、二年前と、ちっとも変わっていないよ。むしろ、二年前よりもきれいになった感じだな」

私が適当な相槌をさがしあぐねているうちに、車はホテル・ロイヤルに到着した。

2

フロントで宿泊手続きをとっている間に、卓也は車を駐車場に入れてもどってきた。

「ぼくはロビーで待っている。バスをつかって旅の垢でも流してきたまえ。それから、いっしょに食事でもしよう」

「今夜は、もうお仕事はないの？」

「ああ、もうないんだ」

卓也はきっぱりといったが、おそらく、私のためにだれにかわってもらい、時間をつごうしたにちがいがなかった。

私は、いわれたとおりに部屋へ行き、シャワーを浴びてから、着替えて降りた。

ロビーは、種々雑多な人びとでうまっていた。日本人が多いのは当然だったが、ロビーを往来

する人影のなかで、私の眼を惹いたのは、頭髮をいわゆるG Iカットにしたアメリカ人の若者たちであった。それも、一人や二人ではなかった。数人が一組になって、往来していた。否応なしに、人眼を惹く動きだった。

「あれは……」

卓也は私の言葉をうけた。

「そう、ベトナム帰りのG Iさ。近ごろ、めっきりその数がふえたようだね。街なかじゃわからないが、こういうところで見ると、なんとなくわかってしまうもんだな」

卓也のいったとおりのことを、私も感じていた。ホテルに出入している人びとのもつ、どこか浮きうきした素振りと、かれらの発散する雰囲気とは、微妙な喰い違いがあった。喰い違いというよりも、異質なものというべきかもしれない。

もちろん、かれらは背広を着ていた。軍服や銃帯をつけているわけではなかった。外見上から、兵士か市民かを識別できるものはなにもなかった。にもかかわらず、私には、かれらが銃を背負い、重い軍靴をふみしめて歩くさまを、はつきりと想い描くことができた。そしてかれらは、このホテルの平和なたたずまいにとまどっているようでもあり、怒っているようでもあった。

卓也は、私の手をとって、回転ドアの方へ進もうとした。

「久しぶりで、和食の方がいいだろう。ホテルにもあることはあるが、外の料理屋へ案内するよ」